

自動分析装置LABOSPECT008で経験したラテックス項目のデータ異常について

◎頃橋 信慶¹⁾、倉田 主税¹⁾、谷口 恵理¹⁾、豆田 清美¹⁾、山口 弘美¹⁾、田中 忍¹⁾
奈良県立医科大学附属病院¹⁾

【はじめに】 ルーチンの中で RPR 試薬の測定値が偽高値になる現象が稀に（1日に1件程度の頻度）確認された。同一条件での再検結果が陰性化する例があり、単純な非特異的反応とは考えられないため、この現象の確認と原因検索のための検討を行った。

【測定試薬・測定機器】

測定試薬：LASAY オート RPR（シマ研究所社）

測定機器：日立 LABOSPECT008（1号機，2号機）

【方法】 偽高値が確認された検体（完全な陰性検体）について、①多重連続測定を行い、現象の再現性の確認、②反応タイムコースの確認、および③分析パラメータ（攪拌強度、試薬総液量）を検討した。また、④1ヶ月間のルーチン検体（計1421検体）について、2台の自動分析装置にそれぞれ通常パラメータと検討パラメータ2種（レート法、エンドポイント法）を設定し、同時に測定した。

【結果】

- ① 陰性検体での再現性の結果、1検体が偽高値を示した。
- ② 偽高値検体のタイムコースに特徴的な形状を確認。

- ③ 攪拌強度の変更は効果が確認されなかった。総液量を減量すると、再現性が向上した。

- ④ 1421検体中、正規パラメータの偽高値は27検体、検討パラメータでは偽高値は確認されなかった。通常パラメータの偽高値は1号機に集中（1号機：24件、2号機：3件）して確認された。

【考察】 反応タイムコースの形状から攪拌不良による同時再現性不良が原因と考えられた。通常パラメータでの測定で認められた偽高値とその出現頻度の機器間差が、検討パラメータでの測定で回避されたことから、総液量を減量した適切な設定が攪拌効率の向上をもたらし、機器による攪拌能の差異を凌いで正確な測定に繋がったと推測した。

【結語】 ルーチンの他項目に問題ないことから装置の僅かなコンディション変化が試薬の組成によって項目に与える影響が大きく異なると思われる。今回の経験を活かし、今後のルーチンにおいてのトラブルシューティングに役立てたい。

（連絡先：0744-22-3051 内線1225）